夜想
茶会記
#03

盛夏春秋山荘の遊

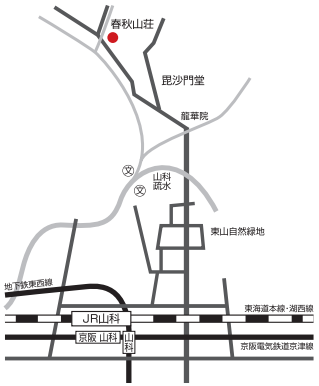
茶会記とは、茶会で使われた道具一式が記録されたもので、そこに参加した人も記されることがある。「さかいき」という音に魅かれてニューズレターに茶会記という名を付けて、イベントや展覧会で行われたこと、そこで初めて成立して、そこから拡がっていく可能性をもったものを記して、これからの喚起を要請したい。自分自身にもまだ見えぬ人にも。

/// 2016.10.01号

はじめに

良く言うのだけれどアートは誰に頼まれてやっているわけではないので、そこを忘れると、意義がどこかで思い上がってしまって変なことになる。自分の存在意義というのも同じことで、そうしたジレンマを時々解放してあげたい。未曾有の断裂が文化を襲ってくる時に、大きく息を入れて、気を遊ばせる、悦楽などというものを思いだす。そんなことをしてみたい。もしかして来るものに出会えるかもしれない。目的は後からついてくる。無駄と無目的と無効率、それが創造を産みだしてきた。先人に倣いしばしの「遊」をとりたい。

（今野裕一）



◆2016年8月16日「春秋山荘サロン お茶で遊ぶ」

春秋山荘に遊ぶようになったのは、町屋か茶室で美術を見たりお茶をみたいと思ったことにはじまる。たまたま春秋山荘を借りることができ、声をかけて、このサロンを動かすメンバー（赤羽卓美、福田容子、岩橋賢、菊池しのぶ）を頼んだ。どうにか動き出し念願の茶会を催すことができた。

中国茶、紅茶、珈琲、抹茶、煎茶…何によらず、水と温度によって味は変わる。味の変化は、誰に淹れるか、誰と飲むかという対面する人の有り様に左右される。無為な緊張は味を阻害する。ここでは自在の不作法のお茶飲み会を基本にしたい。点前はシモーヌさん。茶碗、茶器は夜想・髑髏展（2016年5月13日［金］～6月6日［月］@春秋山荘）のときに夜想に向けて作っていただいた髑髏茶碗を中心に相場るい児さんの作を用意。茶器を自由に選んでいただいて抹茶をいただくという趣向にした。

/// CHAKAI KI

【茶碗・水指・建水・蓋置】

相場るい児

白虎社で音楽を担当していて陶芸作家に転身した相場るい児。夜想との出会いは近々のことだが、親近をもって作品を次々に作り上げてくれた。銘は今野裕一。

【掛物】

「The Long Goodbye」山本直彰

「世見帰る」フジイフランソワ

山本直彰、フジイフランソワともに日本画のジャンルでユニークな作品を描き続けている。

【菓子】

鬼灯　楳心果・馬場英豪

馬場英豪は鋭い感性で斬新な和菓子をつくる。京都で修業を積み、現在は東京・銀座と青山に店を構えるHIGASHIYAの工房「八雲茶寮」の和菓子職人。

【御茶】

さみどり　山本甚次郎

成里乃（なりの）　堀井七茗園

山本甚次郎、堀井七茗園ともに伝統の本簀（ほんず）による覆下（おおいした）農法の茶園を守る数少ない茶農家。それぞれ個性ある単品種の抹茶を飲みくらべていただいた。

/// KASHI

「鬼灯（ほおづき）」

楳心果・馬場英豪

「鬼灯」とだけ記された包みを開けると、青みがかりから熟れた真朱まで、ごく少しずつ色が移ってひとつとして同じでない27個の鬼灯の実が現れた。憎いばかりの心尽くしに、その場で即決、取り分けた銘々皿を一列にならべて、グラデーションの妙を愛でることにする。並べて見れば、それは夏から秋へ移ろうとする季節そのままで、立秋を過ぎた残暑の頃になんとも相応しい。せっかくなので、それぞれ好きな色味を選んでいただいた。この菓子、鮮やかな練り切りの中に絹のようになめらかなこしあんを柔らかく抱いているが、口に入れる頃合いにちょうと良い柔らかさになるよう水分を調整してあるという。鬼灯は市も花も夏の季語だけれども、鬼灯だと秋になる。この日も暮れるにつれて風は涼しく、夏の終わりを告げる送り火の点灯とともに強い雨が降り出した。

/// CHA

「さみどり」「あさひ」山本甚次郎

「成里乃」堀井七茗園

お茶の味は実に個性的かつ千差万別で、初めていただくときはどんな味わいなのかと心躍る。茶碗のなかに茶畑の気配を感じたというと気障すぎるかもしれないが、そうだ、お茶って植物だったんだとあらためて実感されたのが、山本甚次郎の抹茶だった。この日は先に堀井七茗園の「成里乃」をお出しした。こちらはクリーミーでまるでラテのよう。山本さんの抹茶は「あさひ」と「さみどり」の2種のみ。どちらも単品種で、「さみどり」は青々とした爽やかさ、「あさひ」は古風の深みがあり、ややぬるめのお湯でまろやかにまとまる。じつはこの日、我々はまちがって「さみどり」を「あさひ」と言ってお出ししてしまったのだが、召し上がった参加者が口々におっしゃった感想が「みどりっぽい」「すっきりした味」。そうなのかと意外に思いながらお見送りしたあと、夜になってこの取りちがいに気づき、皆さん、なんと見事に味わっておられたことと叩頭したことをお詫びと共に付記しておきたい。

「世見帰る」

フジイフランソワ◆Fujii Furansowa

「The Long Goodbye」

山本直彰◆Yamamoto Naoaki

「蒼月白蛇」

白い蛇が月の光を探して水を覗き込んだが、月は蒼くその驚きで自らが黄金に変身した。

「金龍夢窓」

自らの魂を喰らう髑

「攫燦想隆」

月の燦々たる光を攫い呑みめば、闇を孕んで隆起した頭裡の闇も少しははれるのではないかと夢想する蛸の浅薄。その愛おしさ。

「月華掌覆」

白い蛇が月の光を探して水を覗き込んだが、月は蒼くその驚きで自らが黄金に変身した。

「猩々乱禿」

猩々は禿に化けたものの、好物の蛇を見てつい本性を顕す。

「幻戯夜想」

NOKTURNAL Metamorphosis余りにも夜想的な

「月針竹破」

刃のような新月前の月の光が、鉈で破くように竹を割る。

相場るい児◆Aiba Ruiji

◆春秋山荘の建物について

春秋山荘は山科駅から徒歩20分ばかりにもかかわらず、町とも日常とも距離以上の隔たりが得られる。毘沙門堂の奥、後山階陵と山科聖天に挟まれ、東山を南禅寺・大文字に抜ける山越え道のかかりという立地が重要なのは無論だが、湖北から移築した築140年超の古民家空間の力こそ計り知れない。春からここを揺籃とする今野裕一は「古民家を再生するのではなく、古民家が人を再生する」と言う。この感覚はここに訪れ一定時間を滞在した人には実感として共有されているにちがいない。

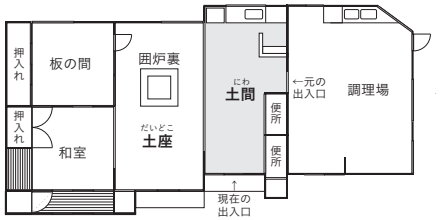
しかしこれは一体どういう建造物なのか。所有者の大野木啓人氏から湖北の木之本から約35年前に移築した余呉型の民家であること、明治3（1870）年築、養蚕を兼業した農家のたてつけであること、ピーター・グリーナウェイの映画「枕草子」の撮影に使われたことなどは聞き知っているが、もっと知りたい。知人から人を紹介してもらい、この日のサロンに招いた。古民家に詳しい一級建築士の清水安治さんは30年余り勤めた滋賀県庁を今年退職し、高島市で「森と水と暮らしをつなぐ小さな家づくり」をテーマに活動を始めている。春秋山荘を移築当時から知り、以前に蕎麦店として利用されていた時期にも何度か訪れたことがあるという。

——この古民家はどこが特徴的なのでしょう？

清水 余呉型は民家建築でも特異な構造形式をもっています。特徴的なのは柱や梁などの組み方です。一般的には土間（にわ）の真ん中に大黒柱があって、その柱を中心に、各部屋の空間を仕切るように梁をかける。いわゆる田の字型です。しかし余呉型は土間（にわ）と土座（だいどこ）の中心に柱を立てないで一つの大きな広間を構成します。梁を十字にかけるので、これを十字梁といいます。この春秋山荘は一般的な大きさで、もっと大がかりな家もあります。この余呉型民家は湖北には今も多く残っていますが、その分布は限定的で、他の地域ではほとんど見あたりません。

この通常なら四つに分かれている間がひとつの広間になっているという構造が余呉型の最大の特徴です。広い空間がとれるので店舗などの空間に適しているとして、好んで移築利用されています。私もこれまで数件の移築をした経験がありますが、九州など遠方にも移築されていますし、海外にも行ってますよ。

春秋山荘 間取り図



——なぜそんな空間構成になっているのでしょうか？

清水 ほぼ同じ地域で「オコナイ」という伝統的な祭が行われています。五穀豊穣と村内安全を祈願して年頭に行われる予祝行事で、その年の祭当番であるトウヤ（当屋）が各家を回っていきます。飾りも大きく、大掛かりな祭で、それを屋内で行うため、広さと高さが必要です。この祭の影響があると思います。

——ということは、オコナイの範囲と余呉型の分布は一致する？

清水 ほとんど一致します（オコナイは滋賀県内では他に湖東地域や大津市、草津市などにも散見される）。大きな空間をとるために大きな梁を入れ、それを受けるために柱が太くなる。近年では、当屋としての見栄などの心理も働き、新しくなるほど太くなる傾向もあるように思います。

ただ、囲炉裏や竈（かまど）が使われなくなり、煙の排気が不要になると、次第に真ん中に細い柱を立てて、障子や襖で間仕切るような住まい方に変化しています。江戸時代に建てられた家でも、戦後になり調理にガスが使わるようになると区切っていますね。ただしそれは間仕切り用の柱なので、大黒柱ではありません。余呉型の大黒柱は梁の根元側の端を受けている。現在の台所側が大黒柱で、入り口側は恵比須柱と呼びます。

——ここも蕎麦屋時代に厨房が増築されています。

清水 下屋（げや）で広げていくケースは多いですね。広間の土座（だいどこ）もいまは板敷きですが、本来は「ニュウジ（入地）」といって、掘り込んで籾殻を厚く入れ、その上にムシロ（筵）を敷くという形です。その奥が板の間もしくは畳の間ですから、必ず段差がつきます。土座が入地から板張りに変わって構造的必然性がなくなったあとも、余呉型でつくるときには、ここに段差が伝統的に残っていました。

——いまでもこのかたちでつくるのですか？

清水 いまはもうつくりません。ですが、戦後ながらく、屋根は瓦葺きになってもこのかたちが残っていました。春秋山荘の建物はいいですね。しっかりしています。

——それは部材が？

清水 はい。太くて立派です。材はケヤキが多く使われています。というのも、元の所在地にあたる姉川（滋賀県長浜市）流域は水位が高いのですが、水気の多いところには雑木のケヤキ（欅・槻）が生えやすいのです。山にはあまり生えません。山はトチ（橡）やブナやクリ（栗）などが多いですね。長浜のあたりの平野は昔はケヤキだらけだったのではないかと思います。地名のタカツキ町も、今でこそ「高月」と書きますが、かつては大阪の「高槻」と同じだったようで、地名がケヤキに通じます。井上靖の名著『星と祭』に登場する渡岸寺（とうがんじ）近くのお宮さんをはじめ、高月町の神社の境内はケヤキだらけです。きっと昔からそうだったのでしょう。その普通にある木を使って建てたからケヤキ普請になったというわけです。当時は必ずしもケヤキは高級な材では

ありません。やはりスギ、ヒノキが上等で、ケヤキは雑木です。この家も農家だったのでしょうね。

――ケヤキを使っているのがひとつの特徴ということですね。

清水 農家が使える木として、近くで簡単に手に入るのがケヤキだったということだと思います。かつては高級なスギ・ヒノキはなかなか使えなくて、ケヤキやマツしかなかった。今では滅多にこんなところにケヤキを使いませんが、贅沢で使っているわけではありません。

――こういう古民家が湖北にはいまも多く残っているということですが、そのなかには移築可能なものもあるのですか？

清水 あります。移築してほしいという依頼が何軒かあります。実際、これまでに僕も何軒か移築しています。ですが、やむをえずです。できることなら移築したくはないんです。しかし住んでいる人達にとって不要であれば取り壊され、廃棄されてしまいます。それならば移築してでも遺すことができ、使われている方がまだしも。僕がこれまでに見た一番立派な家も滋賀の栗東に移築して、演劇の稽古や上演などに使われ、活かされています。■

p7,9 photo: Korechika Shinozuka

/// EDITOR'S NOTE

人の居ない家は荒むというけれど、晩春、まだ夜の冷えこむ4月29日に初めて足を踏み入れた時はあきらかに空気が違った。そこはたしかに人でないものたちの世界だったと思う。それがひと月たち、ふた月たち、「髑髏展」「床下展」が開かれ、茶会やトークショーが行われて、蝉の合唱が始まるよりは早く、アートと人肌がしっくりとなじむ親密な場になってきた。いま目の前に見ている風景は現在だけのものではない。湖北の農家が山科に運ばれ、蕎麦屋になったり人が居たり居なかったりしてきた、その有形・無形の営みが関わり合い積み重なって、いまの春秋山荘をつくっている。よく見ると更新の跡もじつは残っていて、たとえば元は余呉型の特徴とおり妻入りだったとか、現在のアプローチは庭の勝手口から入っているのだとか、庭側の縁側はおそらく増築されているだとか、改めて気づくことがいくらもある。

山荘でお茶の時間を共にした参加者がこんな風に振り返ってくれた。「みなさん、開放されるんですね、きっと。この窮屈になっていくご時世、文学や表現活動の価値を改めて感じ入りました」。器と営みが滲みあう春秋山荘の小宇宙。大事なものが根こそぎにされていく現代の都市に生きる私達がここにぬくもりと切なさを感じるのも当然といえば当然のことで、だからこそこういう空間を安易に都市的な用に供すると、途端に台無しになってしまったりもするのだろう。クリーンで明るいばかりが世界ではないわけで、日頃ゆき場のない割り切れなさや夕闇に微睡むひとときもあっていい。盛夏の日中はさすがに少々暑かったけれど、これからは過ごしやすくなる。秋にはモンブラン、冬はチョコレートか雪餅か。囲炉裏を囲んで、アートとお茶と、どんなお菓子を楽しもうかと夢想している。

（福田容子）

/// BOOKS

今和次郎
『日本の民家』
岩波文庫／1989

考現学（モデルノロジー）の創始者として知られる今和次郎による日本民家の入門書。柳田國男らとともに民家研究を始めた30代の今が日本全国を行脚して集めた民家採集の譜。「村の人々の日常生活を含めて描き出された民家の小宇宙は、しみじみとした郷愁に満ちてあたたかい」と評した藤森照信の解説も秀逸。

宮本常一
『日本人の住まい』
農山漁村文化協会／2007

全国を歩いて「忘れられた日本人」を蘇らせた民俗学者・宮本常一が生活者の視点から見た日本の民家のかたちと暮らし。土に根づいていた日本人の「生きる場」としての宮本民家論も抜群だが、この本の白眉は図版・写真の充実ぶりだ。戦前の郷土史から反故紙の裏の走り書きまでを探しだしては選びぬいた編集魂に敬意を表する。

シモーヌ・ヴェイユ
『根をもつこと（上・下）』
岩波文庫／2010

地理的・社会的・霊的な土壌に根をもつこと。それは魂の最も切実で最も無視されてきた欲求だとヴェイユは言う。二次大戦で根こぎされたフランスにあって政治と労働と知の失敗と可能性を直視した本書は現代日本の道標たりうる。民衆がそれと知らずに全体主義に呑みこまれる危険に警鐘を鳴らしつづけた女性哲学者の未完の遺書。

/// INFORMATION

◆開催中

内と外　あわいのこと。
人と人形とが巡り会う、たった一度の、えにしの為に。

平安工房 人形展「縁 ENISHI」
2016年10月1日［土］～10月31日［月］
※会期中の金・土・日・祝のみopen　入場料：500円
金｜12:00～20:00　土日祝｜12:00～19:00（最終日｜12:00～17:00）
http://www.yaso-peyotl.com/archives/2016/06/enishi.html

◆次期開催

- **「野澤松也 創作浄瑠璃弾語」中川多理の人形とともに。**
  2016年11月5日［土］15:00～
- **タニノクロウ展**
  2016年11月6日［日］～11月20日［日］
- **タニノクロウ対話** タニノクロウ×今野裕一
  2016年11月14日［月］19:30～

京都・山科 春秋山荘
京都市山科区安朱稲荷山町6
TEL：075-501-1989
各線山科駅徒歩約20分、駐車場有

2016年
10月01日発行

発行人◆夜想＋今野裕一
編　集◆福田容子

デザイン◆ミルキィ・イソベ＋安倍晴美
夜想茶会記運営◆福田容子　赤羽卓美　岩橋賢　菊池しのぶ

Parabolica-bis　HP｜http://www.yaso-peyotl.com/　Twitter｜https://twitter.com/yaso_peyotl
FaceBook parabolica-bis｜https://www.facebook.com/YeXiangYasoParabolicaBis
FaceBook Shunjûsansô｜https://www.facebook.com/syunju.sanso/